

ワールドカップ 1988—国際会議の舞台裏—(3)

今野 浩 (中央大学)

5. インディアナ 1979

ウェスト・ラファイエットに到着した中年男には、4カ月にわたるミゼラブルな1人暮らしが待ち受けていた。筑波大学での「ティーチング・雑務マシーン」生活から逃げ出すためにここにやってきたのだが、到着する前から私は激しく後悔していた。

しかも大平原のまん中に位置するウェスト・ラファイエットには、孤独を癒す装置は何もない。もともとカルチャーがないアメリカの、“本格的いなか”の名物はただ1つ、“退屈”である。

到着した日の夕方、私はアンドリュー・ウィンストン教授の大邸宅に招かれ、歓待を受けた。30歳になる前に、パデュー大学の正教授ポストを手にしたこのスターとは、4年前にウィーンにある「応用システム分析研究所 (IIASA)」で、屋根裏オフィスをシェアして以来の付き合いである。

「一流サイエンティストは、1階の大理石・シャンデリア・オフィス。二流は2階の大理石・蛍光灯オフィス。そして俺たち三流サイエンティストは、狭苦しい3階の板張り物置部屋」と、自嘲交じりに意気投合した間柄である。

この人は1956年のハンガリー動乱で、乾草を積んだトラックに乗ってオーストリアに脱出した夫人の、20年ぶりの里帰りに合わせてウィーンを訪れたのだが、夫人が留守にしていた1カ月、われわれは何回となくオペラ座やディナーを共にした。留学中は勉強ばかりしていて、ほとんど友人を作るヒマがなかった私にとって、数少ないメイドインUSAの友人である。

ディナーのあと、ワインと夫人手作りのウィーン風タルトで歓談する間に、モントリオール・ショックはかなり和らいでいた。

「モントリオールはどうだった？」

「暑くて閉口しました。それにフィリップ・ウォルフにひどい目にあわされて、へろへろになりました」

「Big bad wolfが何をやったの？」

「Big bad wolfというのは、赤ずきんちゃんに出てくる狼のことですね」

「そうそう。あの男はタッカー＝ダンツィク教授の権威をかさにきて態度が大きいので、そう呼ばれているのさ」

そこでモントリオールでの顛末を説明すると、

「それはひどい。しかし狼に食われちゃったわけではないから、忘れちゃえばいいんだよ」と慰めてくれた。

この言葉を聞いて、私はかなり元気が出た。確かに酷い目にあわされたが、食べられるまでに到らなかった（実際ここで生きている）。ビック・バッド・ウォルフに、もう1つの勲章を進呈しただけの話だ。

その晩ホテルに戻った私は、“ビック・バッド・ウォルフ、ビック・バッド・ウォルフと呟きながら、3日ぶりに安らかな眠りに就いたのである。

中学生時代からアメリカ音楽、アメリカ映画を見て育った私の中には、アメリカ文化が浸み込んでいた。

その後、理工系大学で6年を過ごす間に、科学技術先進国アメリカに対する憧れはますます強くなった。そして20代後半からの、3年にわたるスタンフォード留学で、私は25%日本人・75%アメリカ人になってしまった。

3年以上をアメリカで過ごした人のほとんどが、90%アメリカ人になったのに比べて、日本人部分が多めに残ったのは、家の中では純日本人の家族と暮らしていたからである。

しかしウィスコンシン大学で、研究者として1年を過ごすうちに、私は50%日本人に戻った。カリフォルニアとは似ても似つかない零下30度の冬と、研究者としての負け犬生活を経験したからである。

アメリカは優勝劣敗の国である。スタンフォードで勝者の優越感を味わった私は、ウィスコンシンで敗者の劣等感を養った。しかし負けたのは、自分に力がなかったからだ。ここはひとまず日本に帰り、力をつけて再チャレンジするしかない――。

ところが、1974年から75年にかけて1年をウィー

ンで過ごす間に気がついたのだ。少年時代に読んだ小説のほとんどすべてが、ヨーロッパ産だったということ、また中央公論社から出た、世界史全24巻の中の18巻までが、ヨーロッパ史であったということに。

ウィーンに行くまでの私は、“没落するヨーロッパ”から学ぶべきものは何もないと考えていた。しかしウィーンで1年生活すれば、どんなにアメリカかぶれでも気がつくはずだ。世界に君臨するアメリカにはカルチャーがない、ということに。

このことに気づいた日本人のアメリカ人指数は、20%に下がった。そしてアメリカ中西部で“最後のアメリカ生活”を送るうちに、それは10%にまで落ちてしまった。

少年時代から憧れていたアメリカと、スタンフォードでハネムーン生活を送った男は、ウィスコンシンでの冷酷な仕打ちに幻滅感を味わい、性格の不一致が原因でウィーンで別居生活に入った。そしてインディアナで、10年余りの結婚生活に終止符を打ったのである。

なぜそうなったのか。それは70年代末のアメリカは、(私から見ると)狂い始めていたからである。こんな人と生活を共にすることはできない。

1979年のアメリカは、高失業率・高インフレ・高金利の三高状態にあった。全国平均の失業率は6~7%ということになっていたが、隣のオハイオ州では10%を超えていたし、インフレ率と市中金利は15%超という驚くべき水準にあった。収益率が20%に達する金融商品が売り出される中、ビジネススクールの教授たちは、少しでも多くの利益を手に入れようと、右往左往していた。

こんなところに起こったのが、イランのアメリカ大使館占拠事件である。激怒したアメリカ人は、イラン人を攻撃した。パデュー大学でも、KKKのような白頭巾を被った集団がイラン人留学生を追い回し、棍棒で殴打した。私のイラン人ティーチング・アシスタントも頭に重傷を負い、長期入院を余儀なくされたが、結局犯人は捕まらなかった。警察が本気で捜査する気がなかったせいである。

大学の中では、女子学生が単身赴任の中年教授に、身体を賭けた単位獲得攻勢をかけてくる。また成果が上がらない助教授は、窓なしオフィス(本来は倉庫)に送り込まれる。「窓なし助教授は、そこから脱出しようと思って本気で研究するから、却っていいのではないか」とうそぶく窓あり准教授。また公正なはずの人事の裏には、日本並みの情実人事がはびこっているという。

留学生時代には気がつかなかった、アメリカの様々な問題点が、4カ月の1人暮らしの間に見えてきたのである。

留学生として過ごした3年間、私は家族とともに暮らしていた。アメリカに漬かっている時間は、ウィークデーの朝9時から5時まで、週40時間に過ぎない。ところが1人暮らしとなると、1日24時間・週7日間完全にアメリカに浸っている。

眠っている時間は、日本もアメリカも違わないだろうという人には、「それは違う」とお答えしよう。眠っている時間も、日本男児はアメリカに呑み込まれないように身構えているのだ。

つまり1人暮らしのインテンシブ・アメリカン・ライフ4カ月は、家族とともに過ごす2年以上に相当するのである。かくして、3年間の留学生生活で注ぎ込まれた、50%分のアメリカ成分のほとんどは、4カ月の間に吸い出されてしまった。

パデューに到着したとき、私はアメリカで“生活”するのは、これが最後になるだろうと考えていた。間もなく40歳を迎える私には、高校1年生から3歳までの3人の子供がいた。これから先当分の間受験生活が続くから、アメリカで“生活”するとすれば単身赴任である。しかし中年男の単身生活リスクは、いかなるリターンをも上回る。だからこれから先は、アメリカに行くとしても、1週間程度の“旅行”で済ませよう。

ところがアメリカを去るときの私は、住むことはもちろん、当分の間アメリカに足を踏み入れたくないと考えるようになっていた。その理由は、超保守・反共主義者ロナルド・レーガンの台頭である。

穏健派(弱腰)のカーターに対して、アメリカ人は怒っていた。つけ上がるイラン、その背後に控えるソ連と対抗するには、強いアメリカの復活を唱えるレーガンのような人が必要だ――。

スタンフォードに留学していたとき、この人はカリフォルニア州知事として財政再建に成功し、人気を集めていた。しかし私にとってのレーガンは、「学問の殿堂」カリフォルニア大学を苦しめる悪代官だった。

ジョン・ウェインのようなロナルド・レーガンが大統領になったら、ブレジネフのソ連と全面核戦争が起こるかもしれない。それだけではない。人種差別主義といわれるこの人は、日本製品排斥、場合によっては日本人排斥にも手をつけるかもしれない。

レーガンのアメリカ。それはカスター将軍の指揮の下、インディアン討伐に向かう第7騎兵隊そのものに

映った。このような人を大統領に持つ国には、足を踏み入れたくない。私は自分が生まれ育った日本で研究・教育に専念し、いつの日にか一流の研究者となって、アメリカを見返してやろう。

6. RAMP 1980

日本では珍しく、3学期制を採用している筑波大学では、2つの学期に講義をまとめてしまえば、3学期目は講義をやらずに済ませることができる。夏季休暇と組み合わせれば、講義に穴を空けずに5カ月間の海外出張ができるということだ。

中にはこの制度を利用して、毎年5カ月をアメリカで過ごす猛者もいたが、周囲での評判は最悪だった。

私の場合は、4カ月余りの出張を認めてもらうために、帰国後は通常の6割増し、すなわち75分の講義7コマを担当することを約束していた。これまでに担当したことのない科目も含まれているので、準備時間を含めると週にぎっと25時間はつぶれる。学長直属の大学企画室業務や、諸々の会議と雑務に20時間。その上、年度末には様々な報告書を書かなくてはならない。

工学部には、“1月から3月までの間に死ぬこと罷りならぬ”，という無茶苦茶な教訓があるほど、この期間の工学部教授は忙しい。ところがここに、もう1つの大仕事が降ってくるのである。

クリスマス・イブに帰国した私は、アメリカ土産に持ち帰った肛門脇の鶉卵犬のおできと、成田空港で荷物を持ち上げるときにやってしまった、3度目のぎっくり腰のおかげで、年末年始を唸り続けて過ごした。

12月から始まっている講義を、これ以上休講するわけにいかないのだから、体を斜めにしてヨロヨロと大学に出てきたところ、2年前に解散したOR学会の「整数計画法研究部会」で幹事役を務めてくれた、東工大の鈴木久敏氏から電話がかかってきた。

「鈴木です。もうそろそろかなと思っていましたが、いつお帰りになったのですか」

「クリスマス・イブです。暮れと正月は、ぎっくり腰とお尻のおできの大噴火で寝て暮らしました。まだ完全には治っていないので、ヨタヨタしながら出てきたんですよ」

「それはひどい目にあいましたね。お帰りになったらすぐに連絡をくださるだろうと思っていましたが、そういうことだったのですか。それはそうと、モントリオールの会食のあと、誰も見かけた人がいないので、どうしたのだろうと噂していたんですよ」

「理事会でいやなことがあったので、最後の2日はシンポジウムをさぼって、市内観光で気晴らしをしていました」

「そういうことですか。実はあの会食のあと、若手の連中と今後のことについて話し合いましたね。その結果、せっかく立候補したんだから、このまま引き下がるのは残念だということになったんです」

「88年の大会に、もう一度立候補しようという話ですか？」

「そうそう。それで4月からOR学会の中に、『数理計画法研究会（RAMP）』を設立して、本格的な準備活動を始めることが決まったんです」

「そうですか。伊理先生や刀根先生も賛成しているのですか」

「それがなくてはうまくいかないのだから、すでに了解を得ています」

「茨木さんや関西の連中はどうですか」

「最大限協力してくれるということです」

「それならやるしかありませんね。私もできるだけのことはやらせてもらいましょう」

「そうこなくちゃね。実はOR学会に出した書類には、主査として今野さんの名前を挙げておいたんですよ」

「何ですって?! 本人の了解もなしに名前を出すなんて、エンジニア倫理に悖るのではないですか？」

「これはいわば、ユニーク・ソリューションというやつですよ」

「伊理先生か刀根先生にやってもらえばいいのに」

「偉すぎる人はダメなんですよ。それに海外とのチャンネルが豊富な人でないとダメだから、そうなるとう誰が見ても答えは1つ」

「ちょっと待って下さいよ」と言ったものの、これはもう断れないと思っていた。なぜならパデューからの帰りに立ち寄ったスタンフォードで、ダンツィク教授との間で以下のようなやりとりがあったからである。

「モントリオールのときは、御挨拶もせずに失礼しました」

「あのときは残念なことになったね。アレックス（オルデン）もエゴン（バラス）も、東京なら良かったのと言っていたよ。しかしこれで、88年は日本で決まったようなものだね」

「88年ですか？」

このときは、そんなに遠い先のことを考えても仕方がないと思っていた。わけ知りの経済学者は、5年後はおろか3年先も、世界がどうなっているか全く分か

らないと言っているくらいだから、8年後のことなど考えても仕方がないし、“あの連中”と付き合うのはもう御免だと思っていたのである。

しかしダンツィク・オルデン・バラスという大物たちが日本開催を希望し、日本の若手がやる気になっている以上は、やらざるを得ないのではないか。

「分かりました。ただし1つ条件があります。あなたが幹事を引き受けてくれることです」

「また今野・鈴木コンビだと、まずいんじゃないでしょうか」

「逃げようとしてもダメですよ。あなたほどの事務能力がある人は、ほかにいません。これこそユニーク・ソリューションです」

鈴木久敏氏は、1948年生まれの32歳。当時は東工大経営システム工学科の助手を務めていたが、この人の事務能力は傑出していた。何にでも良く気がつくこの人に幹事を頼んでおけば、すべて遺漏なく事が進むはずだ。

30年後の今、この人は大学改革の嵐の中で、筑波大学の人事・総務担当副学長という、普通の人であれば発狂するような仕事を任せられることになるのであるが、その事務的手腕は若い頃から誰もが認めていたのである。

かくして1980年4月に日本OR学会の中に、「数理計画法研究会（RAMP）」が設立され、88年に向けて活動を開始することになった。

RAMPの活動は、月1回土曜日の午後東京で開催する月例研究会と、年1回秋に全国持ち回りで実施する2日間のシンポジウムである。どちらも海外にアピールするため、エース研究者に登壇してもらうとともに、できる限り多くの外国人研究者を招くように心がけた。

記録をひもとくと、80年の第1回シンポジウムには100人、81年には150人の研究者が集まってくれた。各12件の発表のうち2件は外国人である。

OR学会のメンバー約2,500人の中で、数理計画法を専門に研究している人は、たかだか100人程度である。そのような状況の中で、150人も人が集まってくれたのは、“2日間でこの分野における過去1年間の重要な成果がすべて分かる”というキャッチフレーズと、海外から招いた有力研究者に引かれて、専門家以外の人に来てくれたためである。

われわれはRAMPシンポジウムの内容を、「国際

数理計画法学会」の会報「OPTIMA」を通じて全世界に発信した。この結果3年目に入ると、RAMPの存在は広く世界に知られるようになった。

成功を納めた最大の理由は、伊理・刀根両教授のリーダーシップの下で、日本中の研究者が大きな目標に向けて、一致団結して協力したことである。学問分野によっては、同じようなことをやっている人たちが、東と西に分かれて抗争しているケースもある。しかしこと数理計画法に関しては、全国の研究者が1つにまとまっていた。

世界を相手に戦っている人たちにとって、国内で争っている暇はない。我々が目指すのは、ワールドカップでベストスリーに入ることであって、そのためにはオールジャパンで頑張るしかない。

関東リーグのまとめ役としては、関西リーグに対して若干の違和感を覚えることがなかったわけではない。例えば、関西の人にシンポジウムのオーガナイザーを依頼すると、周辺の人だけで固めてしまうというようなことが起こる。関西リーグは、Aさんに頼むならBさんにも頼まざるを得ない、というようなことがあるらしい。

また関西リーグが長幼の序を重んじるのに対して、関東リーグは、東大・東工大という拮抗した力を持つ2つの大学の研究者の緊密な協力の下で、実力本位の体制を組んでいた。たとえ先輩でも、成果を出さなければ置いていかれる。

カルチャーが異なる東西両リーグの間には、時折小波が立つこともあったが、大事に至らずに収束したのは、伊理・刀根両カリスマの下で、東西の若手リーダーが互いに相手を立てていたからである。

既に紹介したとおり、西のリーダーである茨木俊秀京都大学教授は、分枝限定法のわが国のチャンピオンで、若いころから国際的に高い評価を受けていた。日本の数理計画法研究者の中で、500編以上の論文を書いたのは、伊理教授とこの人だけだろう。

一方東のまとめ役には、茨木教授に匹敵するような業績はなかった。しかし私は、「数理計画法の父」の息子だった。偉い父親を持つ息子は、いつも肩身が狭い思いをしていたが、私はこの偉大な父によって守られていたのだ。

もし誇るべき実績があったなら、私は鼻もちならないゴーマン息子として、カルチャーの異なる人たちから忌避されていただろう。